

「出来た……！」

苦心を重ねた末に、ようやく惚れ薬が完成した。

両親の営む薬屋で、見習い薬師として修行を始めて今年で二年目。

これまでレシピに沿った簡単な薬の調合は請け負ったことがあつたけれど、初めてお客様からのオーダーを受けて薬の調合を行うことになつたのだ。

（初仕事が惚れ薬の調合っていうのも、なんだかすごいけど）

依頼人は、とある名家のご令嬢。

想い人である公爵様を振り向かせたいらしく、「一目で夢中になつて貰えるような薬を頂戴！」とオーダーされたのだ。

ベースになるレシピを参考に、より効果が強くなるよう試行錯誤し、完成に至つた。

「明日取りにいらっしゃるはずだから、それまでにしっかりと葉を乾燥させておかないと」

小箱に銀色の錠剤を並べ、乾燥棚へ並べる。

出来たての錠剤はまだしっかりと固まっていなかったので、乾燥させる必要があるのだ。

ちりんちりん♪

ドアベルが鳴り、誰かが店へ入ってくる気配がする。

「わ……！ 今カウンターに誰もいない時間なのに……！」

慌てて被っていたエプロンを脱ぎ捨て、お店へと向かった。

「お待たせしてすみません！」

小走りでカウンターへ駆け込むと、艶のある黒髪を斜めに流した、

軍服姿の長身の男性が立っていた。

（ルシウス様……！）

反射的に頬が赤くなってしまう。

ルシウス・アダルバート。

王国直属の騎士団長で、伯爵の位を賜っている。

王都・領地の防衛計画策定や国境警備、魔獣討伐、不穏分子の排除など、国の安全保障の最前線を一手に担っている。

その判断力は非常に優れており、まさに【軍神】の名に相応しいと称えられている。

先の魔獣討伐では自ら最前線に立って指揮を取り、一人の犠牲者も出さずに見事恐ろしい魔獣を討ち取ったそうだ。

彼の判断は常に公正明大。

誰に対しても面倒見がよく温厚で、どんなときでも声を荒げたり、威圧するような態度を取ったことはない。

情に厚く、困った人を見過ごせないと私財を投じて貧しい人達への支援にも取り組んでいる。

そんなルシウス様は国王陛下からの信頼も厚く、騎士団員はもちろんのこと街の人々からも慕われている。

そして——一目見ただけで目を奪われてしまうほどの美貌の持ち主。彼に密かに憧れている女性も多い。

私も、その一人だけ。

（ああ、今日も麗しい……）

あまりじろじろ見ては失礼なので、ちらちらと盗み見る程度しか出来ないけれど。

きつちりと整えられた短髪の黒髪は、光沢のある絹糸のように滑らかで。切れ長の瞳は、まるで夜明け前の空の色を宿したかのような深い紫色で、見る者全てを射抜くような鋭い光を放っている。

細身の彼は一見すると貴族様らしい優雅な物腰だけれど、制服の生地越しにも、鍛え上げられた均整の取れた身体のラインが見てとれる。清廉で禁欲的な雰囲気は、近寄りがたさを感じさせるけれど、そこが素敵！ と女性ファンにはもつぱらの評判だ。

……私も、その一人だけだ。

「急で悪いが、いつもの胃薬を貰えないか？」

「は、はい！ 少々お待ちください」

背後の薬棚に並んでいるはずの胃薬を探す。

けれど、棚は空っぽになっていた。

（そうだ、ついさつき丁度売り切れになったんだった……！）

「すみません、あいにく品切れになっておりまして……」

「そうか。ではまた出直すでしょう」

「い、いえっ！ 倉庫に在庫があるはずなので、今取りにいつてきます。少々お待ちください！」

そう言い残し、慌てて調合室へ駆け込む。

王国を守護する騎士団長という重責ある立場にあるルシウス様は、気苦労が絶えないらしく胃薬が手放せない。

多忙な方なので、また日を改めるなんて手間は取らせたくない。

「えっと、確か昨日作り足したのがここに……あつたあつた」

乾燥させておいた銀色の錠剤を棚から取り出し、空いている小瓶に

詰める。

「ふう、昨日作つといて良かった。これでルシウス様にお渡し出来る」

小瓶に【胃薬】と書いたラベルをぺたりと貼り、再びカウンターへと向かった。

「お待ちせしました。胃薬です」

カウンターへ戻り、待っていたルシウス様へ小瓶を手渡す。

「ありがとう。手間をかけさせてしまったようで申し訳ない」

「いえ、とんでもありません！ あの時、いつものようにお茶は飲んで行かれますか……？」

「ぜひ、頂こう」

「しょ、少々お待ちください」

今度はカウンター裏のキッチンへ向かい、お湯を沸かしてカップを温めハーブティーを淹れる。

以前、ルシウス様の胃痛が酷い時に、胃痛を和らげる作用があるお茶を出したところ、大好評だった。

それ以来、胃薬を買いにきた時はサービスでお茶をお出しするようになったのだ。

私が淹れたお茶をルシウス様が飲んで下さるなんて、こんな光栄なことはない。

いつ来店してもいいようにと、ルシウス様専用 to 調合したハーブはキッチンに常備している。

トレイにハーブティーをなみなみと注いだカップを載せて戻ると、ルシウス様は店内の隅にある待合用の椅子に腰掛けて待っていてくれた。

「いつもの、ハーブティーです」

テーブルにトレイを置くと、ルシウス様が「ありがとう」と目を細めて微笑んだ。

（ああ……ルシウス様の笑顔、素敵……！）

普段は唇を引き結び、厳格さを漂わせる顔つきなのだけれど。

ふとした時に見せる、くしゃつと崩れた柔らかな笑顔がギャップを感じさせてたまらなくときめくのだ。

「いつものように、ここで薬を飲んでいつでも良いか？」

「はい、大丈夫です」

「では、ありがとう」

ルシウス様は小瓶の蓋を開けると、口に胃薬の錠剤を放り込み、ハーブティーを口に含んだ。

「ふう……やはりこの店の胃薬を飲むと安心するな。すぐに効いてくれて助かるよ」

「お褒めにあずかり恐縮です……！」

「確か、君が調合してくれているんだっただな」

「は、はい。レシピは両親が作ってくれたものですが……少し、自分で改良してみました」

「そうか。だから効き目が早いのかもしいないな。そういえばこの店のハーブティーを飲み始めてから、胃の調子が良くなったんだ。君のおかげだな」

ハリのある低音ボイスで優しく語りかけられて、動悸が激しくなる。
(ルシウス様に褒められた……！)

ああ、今日はきつと神様に祝福された日に違いない。一日良い気分
で過ごせそうだ。

ルシウス様はお茶を飲むとき、何かと私に話しかけてくれる。

気詰まりにならないよう、気を遣って雑談をしてくれているんだと
思う。

飲み終わるとすぐに立ち去ってしまうのだけれど……

この僅かな時間で交わす会話が、私のささやかな楽しみになっていた。
た。

「ところで……この薬、何か新しい薬草でも配合したのか？」

「いえ、いつも通りですが……」

「そうか。身体がやけに火照るんだが……それに、頭がぼーっとしてきたような……風邪でも引いたか？」

「え……？」

さあつ、と一気に血の気が引いた。

その症状は、まさか――

「……っ、はあ、はあ……っ。なんだこれは……胸が苦しい……っ。

それに、鼓動がやけに早い……」

がたんっ！

ルシウス様が胸を押さえて、テーブルへ突っ伏した。

（やつぱり……！）

どうやら私は、ルシウス様に間違えて惚れ薬を渡してしまったらしい。

惚れ薬と胃薬は、どちらも銀色の錠剤。

並べて乾燥棚へ置いていたから、慌てて取り違えてしまったのだろう。

（ど、どうしよう……！　と、とにかく早く、解毒剤を飲ませなきゃ！）

「もつ、申し訳ございません！　ルシウス様！　あのつ、わ、私のミスで違う薬をお渡ししてしまったようです。すぐに解毒剤をお持ちしますので……！」

「待て」

調合室へ向かおうとした私の腕を、ルシウス様が掴む。

「俺を、一人にするつもりか……？」

「す……すぐに戻りますから」

「こんなに俺を夢中にさせておいて置き去りにするとは……君はなんて罪な人なんだ」

「……！」

ルシウス様は目のふちを赤く染め、熱のこもった眼差しで私を見つめている。

手遅れだ。完璧に薬が回ってしまった。

「ル、ルシウス様。落ち着いてください。これは薬の作用です」

「薬だと……？ どういうことだ？」

「ルシウス様が飲んだのは、惚れ薬なんです。だから、わ、私にその……夢中になっているのは薬の効果なので……解毒剤を飲めば、正気

に戻りますから」

「君は、俺が薬ごときに感情を左右されるような、脆弱な精神の持ち主だと思っているのか？」

「い、いえっ！ そのようなことは決して……！」

「解毒剤など必要ない。俺に今必要なのは——君の愛だ」
ルシウス様が立ち上がり、私の肩をぐつと抱き寄せる。

そして、顎を片手で持ち上げ——

「……っ！」

（う、うそ………！ ルシウス様に、キス………されてる………!?）

いくら惚れ薬が効いているとはいえ、生真面目な彼がこんな大胆なことをするなんて。

（もしかして………これって………）

ふと、惚れ薬のレシピに書かれていた注意事項を思い出す。

配合されている薬草のひとつに、強い催淫作用があること。

大量に摂取してしまうと、女性であれば潮噴き、男性であれば射精するまで体内から排出されないため、取り扱いに注意することなどが書かれていた。

本来、惚れ薬に配合するのはほんの微量で良い薬草なのだけれど

依頼主の令嬢から、どうしても想い人の公爵様と懇ろねんごになりたいからと増量をオーダーされていたのだ。

(まさか、こんなことになるなんて……)

「ちゅ……ん……♡ん……う……♡」

ルシウス様は私の唇に自分の唇を押しつけ、ちゅ、ちゅつと強く吸

い上げた。

首が痛くなるほどに顎を持ち上げられて半開きになった唇へ、舌が差しこまれる。

「ルシウス……様……っ♡や、やめて……くださ……っ♡」

「やめない。君だつて舌を突き出しているじゃないか。もっと激しく貪つて欲しいんじゃないのか？」

「ち、違います……♡んっ♡ふう……っ♡」

どうにか逃れようと舌を動かすが、執拗に追い回されてねろねろ♡と絡みつかれる。

（いくら惚れ薬が効いてるからつて、こんなに情熱的なキスをされるなんて……っ♡）

初めてのキスが憧れのルシウス様とだなんて、まるで夢みたいだけ

れど。

これは彼の本心からの口づけじゃない。あくまで催淫作用のなせる技だ。

(だから……ちゃんとわきまえないと……っ)

ぐちゅぐちゅと唾内をかき回すように舌が蠢いて、頬の裏をぐりっ♡と強く舐め上げられる。

口蓋の真ん中を舌先で突かれると、ぞわぞわと唇が甘く痺れてくる。ぴったりと唇を塞がれて息が苦しい。頭がクラクラして、何も考えられない。

(このままずっとキスされてたら、おかしくなりそう……!)

「ふは……っ♡」

唇がようやく離れ、唾液がつうつと細く糸を引く。

そのままルシウス様から逃げるように、カウンター裏のキッチンへ駆け込むと――

「逃げるのか？」

ルシウス様が私の後を追ひ、キッチンへ入ってきた。

「お、お許してください……！ ルシウス様ともあろう方が薬のせいで私などと過ちを犯してしまうなんて、あつてはならないことです」

「君は、俺の想いを過ちと断じるのか？ つくづく舐められたものだ
な」

「で、ですから、それは薬の……っ」

「……往生際が悪い」

だんっ！

じりじりと壁際に追い詰められて、とどめに両手で壁をどんつと突

かれて逃げ場を塞がれる。

「俺にはもう、君しか見えない。君を手に入れるためならなんでもする。力づくでも——な」

ブラウスをはだけられ、下着代わりのビスチェ一枚を纏った姿にされてしまう。

「ルシウス様、ダメです……っ！ んう……♡」

強く抱きすくめられて再び唇を塞がれ、言葉は出口を失う。

ちゅ、ちゅつと唇に噛みつくように口づけされ、顎を食んで首筋に吸い付く。

「……っ、は……っ♡」

「君は俺のモノだと、証をつけてやる」

「あ……っ♡」

痛いくらいに首筋や肩に何度も吸い付かれ、うつ血した赤い跡が幾つも残される。

普段の穏やかなルシウス様とは別人のような荒々しい愛撫に、ずくん♡とお腹の底が疼いてしまう。

（だめ、なのにつ……♡振りほどかなきゃいけないのに……っ♡）

どうしよう。このままではルシウス様が不本意なセックスを私と行うことになってしまう。

騎士団長である彼が、庶民の私と懇ろになつてしまうなんてとんでもない醜聞だ。

（なんとか止めないと……っ）

「ルッ、ルシウス様っ！」

渾身の力で、私の首筋に吸い付くルシウス様の顔を押さえて押しと

どめる。

「燃えさかる愛の口づけを止めるとは、無粋にも程があるぞ」

「も、申し訳ございません！　ですが、私のお話を聞いて頂きたくて……」

「君からの愛の告白なら、いくらでも聞くが」

真顔で言われて、こっちが恥ずかしくなってしまう。

これがあの、生真面目が服を着て歩いているようなルシウス様なのだろうか。

おそろべし、惚れ薬。

「こ、告白ではないのですが……あの、惚れ薬の解毒には、その……しゃ……射精をする必要があります……その……よ、よろしければ私の手で……射精を、お手伝いさせていただければと……」

苦肉の策だけれど、このままセックスしてしまうよりは、ルシウス様にとつてもダメージは少ないだろう。

本当は男性のモノなんて触ったこともないけど……なんとかなると思うしかない。

「……」

ルシウス様の動きが、ぴたりと止まった。

「君は……俺に抱かれるのがそんなに嫌なのか？」

「……!? そ、それは……っ」

「ならば、なぜそんな逃げを打つ？ 俺はこんなにも君を想っているのに、君は逃げてばかり」

ぐっ、と両肩を強く掴まれる。

間近に迫る彼の顔は、今にも泣き出しそうな切なさに満ちている。

彼が本当に私を好きなんじゃないかと、勘違いしてしまいそうになる。

「もう我慢出来ない。今日こそ、君を俺のモノにする。嫌がっても、止めてやらない」

「……っ！」

肩に強く噛みつかれ、ずきりと痛みが走る。

でも、それすらもルシウス様からの愛の証と想うと嬉しくてたまらない。

（ああ、これ以上はだめ。戻れなくなる。ルシウス様に抱かれたいなくなってしまう）

「やめて……お願いします……これ以上は、もう……」

「嫌だと言っただろう？ 君がどんなに俺を拒んでも、俺は君を離さ

ない」

肩を唇が滑り、鎖骨をたどって胸元へ落ちる。

「胸が苦しそうだな。解放してやろう」

ルシウス様の手が、ビスチェの紐へかかる。

するり、と器用に紐を解かれ、ぶるんっ♡と自由になった乳房が露わになった。

「……やつ、み、見ないでくださ……っ」

れろっ♡

「ひゃううう♡」

いきなり胸を驚づかみにされ、乳房を舌で舐め上げられる。

「こんな豊かで美しい乳房を、ビスチェで押し潰すとは……なんと勿体ない……。いや、でも俺以外の男に、君の胸がこんなにもいやらし

くて魅力的だとバレては困るな……もつときつく抑えられるモノを用意させよう」

（何か物騒な事言ってる……!?）

「ルシウス、様っ……♡も、もうっ、許してください……ああ♡」

ちゅぱ♡れろろ♡ねろろおっ♡

円を描くように乳輪を舐め回されて、甘痒い感覚が胸から背中の中へじんわり♡回ってくる。

「っあ……♡はっ♡ああ♡ふあ♡あっ……♡♡」

「随分可愛い声で鳴くじゃないか。もつと淫らな声を聞かせてくれ

……」

ぴん♡ぴん♡と舌で乳首を弾かれて、肩がびくびくっ♡と小刻みに震える。

じんじん♡と胸のてっぺんが火照って、淫らな熱が乳房全体に広がってゆく。

熱はじわりと身体を取り巻いて、下腹部までゆつくりと降りてゆくのが分かる。

何もかも初めての感覚で、加速する快感に頭がつかない。

（ああ……お腹きゅん♡きゅん♡する……♡どんどんえっちな気分に
なっちゃうよお……♡）

「なんていやらしく腰をくねらせているんだ……こんな姿を他の男の前でも見せているのか？」

「見せて……ませんっ……♡ルシウス様が、初めてですっ……♡」

「……初めて……だと？ キスも乳房に触れるのも……そうなのか

？」

「はい……♡おっ、男の人とっ、手を繋いだことすら、ありませんっ

……♡」

（わ、私ったら何言ってるの……!?!）

熱に浮かされたように、恥ずかしいことを全部ルシウス様へ打ち明けてしまう。

まるで、私まで惚れ薬を飲んでしまったみたい。

「なんてことだ……君の身体を暴くのは俺が初めてだなんて……!」

ああ、神よ……この幸運に感謝する……!」

「……っ!? ひゃあんっ……!」

ルシウス様ががばっ！ と床にしゃがみ、私のスカートの中へ頭を突っ込んできた。

「ルッ、ルシウス様、何を……っ」

「ココにも、俺の証を残しておきたい。君の全てに俺を刻み込むために」

「ひう……う♡」

ショーツにぐい、と顔を押しつけられ、ふーっ、ふーっと息を吹きかけられる。

「あ……っ♡そ、そこはダメですっ……♡ひ、あっ……♡」

れろっ♡ぬろ♡ぬろおおおお♡

「っ……っ♡いっ♡はっ♡ふああ……っ♡」

ルシウス様の唇が、ショーツ越しにクリトリスへ吸い付く。

くち♡くち♡くち♡

舌先がクリトリスの根元をほじ♡ほじ♡して、くつきりと形を浮き立たせる。

今まで感じたことのない甘い衝撃がお腹の中心に走って、びくびく♡♡と仰け反ってしまった。

「ひっあ♡はふ♡うあ♡あっ♡あっ♡ルシウス様♡♡そこっ♡ダメ

……ですっ♡」

「どこがダメなのか、ちゃんと行って貰わないと分からないな」

っん♡っん♡

肉厚の舌先が、膨らみ始めたクリトリスの先端を突く。

芯が硬くなってきた、どんどんクリトリスが大きく、敏感になってゆくのが分かる。

（ルシウス様につ♡私のえっちなところっ♡舐められてるっ♡どうしよう♡お腹の奥っ♡じんじんあつつくて♡沸騰しそうっ♡）

ルシウス様の頭を抱えて、ぴーんと足を突っ張らせる。

初めて知るクリトリスを愛撫される感覚に身体が戸惑って、こみあげる快感をどうやり過ごせば良いのか分からない。

「ひあっ♡んっ♡んうう♡ っ♡ っ♡ うんんっ♡」

これまで出したことのないような、頭から抜けるような甘ったるい嬌声が唇から飛び出す。

どんどん気持ちいい♡が加速して、頭がどろどろに溶けそう。まるで、私が私でなくなっていくみたいで、怖い。

「ルシウス様……っ♡もう、やめて……っ♡あたまつ♡へんにつ♡なりそう……っ♡」

「おかしくなればいい。俺の舌でクリもおまんこも蕩けさせて、俺に堕ちてしまえっ……………」

「っあっ♡はっ♡ひああああ♡」

ぢゅぽ♡ぢゅぽ♡

下着ごと硬く張り詰めたクリトリスへ吸い付かれ、ぐちゅぐちゅ♡と口の中で揉みしだかれる。

気づけば足はがに股に開き、おまんこを差し出すように腰をぐいっ
とルシウス様の顔に押しつけてしまっている。

「ふ…………腰をそんなにヘコつかせて…………ようやく俺の求愛に応えてくれたようだな。嬉しいぞ」

「…………っ♡ち、違いますっ♡こ、これはっ、身体が勝手に…………っ♡」

「牝の本能が、俺に愛されたがっているということか。いいだろう。」

存分に可愛がつてやる」

「いやいや」をするように逃げるクリトリスを唇で捕らえ、舌で根元から倒され転がされる。

「はひ♡あつ♡うああ♡やつ♡あつ♡はああ……っ♡」

にゅぽんっ♡

不意にルシウス様の唇が離れ、息苦しいほどの快感から一瞬解放される。

もうショーツは唾液と私の愛液でぐっしより♡濡れて、クリトリスはぷっくり淫らに浮き上がっている。

「俺を迎える準備は万端のようだな。こんなにおまんこをぐしょ濡れにして……」

指がぐに♡とショーツのクロッチをおまんこへ押し込む。

「へあっ♡」

ぐつと喉を反らせ、思い切りそけい部を突つ張らせてビクついてしまふ。

ふちゅっ♡と愛液がしぶいて、ショーツをさらにベトベトに濡らす。

「こんなにくしょくしょくでは気持ち悪いだろう？ 脱がしてやる」

「あっ……♡」

ぱらり、とショーツの紐が解かれ、股間が露わになる。

ルシウスは再び私の股に顔を埋め、びんびん♡にそそり勃ったクリの裏筋をぞりり♡と優しく舐め上げた。

「っおうん♡」

野太い嬌声が喉から迸る。

布越しに舐められていた時のやや性急な舌使いとは全然違う。舌先

で優しく撫でられているだけなのに、お尻が引きつつてがくがく
っ♡と腰が激しく揺れてしまう。

(やぁあっ♡クリのっ♡一番硬いところ♡舌で触られてっ♡すごっ♡
びりびりいっ♡つつ♡気持ちいいのがきてるうう♡)

クリトリスの神経が集まったところを丹念に舌でなぞられ、びく♡
びく♡が止まらない。

「君は、クリを愛されるのが随分と好きなようだな。このまま、イカ
せてやろう」

ふ。ち。い。い♡

「~~~~っ♡ いっ♡んほおおおお~~~~♡」

ぱっんぱっん♡に膨らみきったクリトリスを唇で押し潰されて、ぞ
ぞぞぞっ♡と腰の周りに強烈な甘痺れが走った。

まるでクリトリスにキスをするように、ぷち♡ぷち♡とクリトリスの芯を唇で食まれ、むにむに♡とこね回される。

「やあぁ♡これええ♡お腹♡ぞわぞわして♡うそ♡やだ♡これやだぁあぁあゝ♡♡」

お尻がぐぐつと勝手に浮き上がって、がくがくが♡と激しく腰が揺れる。

ルシウス様の頭をぎゅうつと抱え込んで、めいっばいクリを唇におしつけちゃってる♡

「あゝ♡らめええ♡来る♡何か♡おっきいのが来ちゃう♡やだ♡やだ♡怖い、怖い……！」

「大丈夫だ、怖くない。さあ、思い切りイケっ……！」

ちゅうううう♡ちろちろ♡れるおおお♡

ルシウス様が舌先でちゅこちゅこちゅこ♡と激しくクリの中心を押し潰して擦りたてる。

ぱちぱちっ♡とお腹の奥で強烈な悦痺が弾け、きゅうきゅう♡とお腹の奥が強く窄まる。

「ひうううう♡あっ♡あううう♡だめ♡だめだめだめだめええええええ〜♡」

びくびくうううう♡

ぴーんとつま先を突っ張って大きく背中を波打たせ、私は絶頂に達した。

「っは……♡あ……はああ……♡」

（イっちゃった♡ルシウス様のくちでっ♡クリトリスれろれろされてっ♡めちやくちやになっちゃった♡）

くつたりと崩れ落ちそうになる私の身体を、ルシウス様が抱き寄せる。

「まだ、終わりじゃないぞ。俺の想いを——ココで受け止めてくれ」

「あ……っ♡」

身体の向きを変えられ、壁に手を突かされてスカートを腰のあたりまでまくられる。

イキたてはやはやのクリトリスに、熱く硬い何かが押し当てられた。

（な……何……？）

「……………っ♡」

恐る恐る振り向くと、ルシウス様のおちんぽが私のお尻に挟まれていた。

「今度は、俺のちんぽでクリを潰してやろう」

「っあ……っあ♡あっ♡ああ♡」

あっつあつの亀頭の先っぽが、クリをぐに♡ぐに♡と押し上げる。

ぬりゅん♡と肉茎がおまんこの上で滑って、ぱくぱく♡物欲しげにヒクつく肉ビラをぬりゅぬりゅ♡と擦る。

「……はあ……っ。すごいな、君のおまんこ肉がちゅうちゅうちんぽに吸い付いている……もう、コレだけでイケそうだ……っ」

ルシウス様がうっとりした様子で腰を引き、ぬち♡ぬち♡とおちんぽをゆつくりおまんこに挟み込んで擦りつける。

ぬるぬる♡にぬかるんだおまんこ肉のキワが浮き立ったおちんぽの血管に擦られて、じわあ♡とお腹の奥が熱く火照ってくる。

（あっ♡くびれたとこでっ♡クリっ♡引っかかれてっ♡これっ♡きもちい♡）

かりっ♡かりっ♡

背後から乳房へ手が伸び、まだ快感の余韻が残る乳首のさきつぽを爪で引っかかる。

更に耳たぶを甘く噛まれ、ぞくぞくううう♡と身体に至る所で快感の粒が弾けて甘く達してしまう。

「いっ♡あっ♡んあ♡はっ♡んううう♡ひっうう♡あっ♡あああ

っ♡

ほかほかおまんこにしっかり勃起ちんぽを挟まれて、にゅこにゅこマンズリが止まらないっ♡

ぴん♡ぴん♡と乳首を弾かれながら、めくれたおまんこの肉ビラにカウパーと愛液でぬるつぬる♡の勃起おちんぽでシコシコ♡されながら、クリもこしこし♡潰されて。

（どうしよう♡このままじゃルシウス様とえっちしちゃうっ♡それだ
けはっ♡ちゃんと♡拒まないっ♡）

頭ではそう分かっているのに、ヘコつく腰が止まらない。

きゅうう♡とお腹の奥が収縮して、おちんぽをナカへ咥え込もうと
してしまう。

「っは……♡くっ♡う……っ♡まずい……君のおまんこが気持ち良
すぎてっ……このまま……達してしまいそうだ……っ」

ルシウス様の腰使いがどんどん速まり、きゅう♡と締まった太も
の間にぬぢゅぬぢゅ♡と激しく抜き差しされる。

にゅっ♡こ♡にゅっ♡♡にゅっ♡こ♡にゅっ♡こ♡にゅっ♡こ♡

ストロークが速まり、ぱんぱんぱんっ♡とルシウス様の股間が私
のお尻へ強くたたき付けられる。

にゆる♡にゆる♡と肉唇を肉竿がすべって、その度にぞく♡ぞく♡と尾てい骨から背中へ愉悅が這い上る。

ルシウス様の動きに合わせてお尻をくいっ♡くいっ♡と左右に艶めかしく振りたくって、共に登り詰めようとしてしまう。

（っあ♡イクッ♡マンズリだけでイっちやうっ♡もおだめっ♡止まらないっ♡♡）

「くっ♡あっ♡好き♡好きだっ……！ 誰にも渡したくない！ 俺だけのモノにしたい！ 頼む！ 俺を好きになってくれ！ お願いだから——」

かすれた切ない声が、私の鼓膜を震わせる。

彼の声は、甘く蕩けそうで、私への愛に溢れていて、想いを受け止めることが出来たらどんなにか幸せだろうと夢想してしまう。

でも、そんなのただの夢だ。だってこれは——惚れ葉がもたらした
副作用なんだから。

ばんばんばんばんっ♡

平手打ちみたいな乾いた音が、部屋へ響く。

ぐんっ♡と熱く膨らんだペニスが、どくんっ♡と脈打って——

「っ♡ふあああああああ——っ♡」

どびゅううう♡どぶどううう♡びゆるるううう♡

白濁がいなく肉棒から迸り、私のお尻にびちやびちや♡と飛び散
った。

（はああ♡あっつい子種汁がっ♡私のお尻にっ♡だめっ♡これだけ
でまたイっちゃいそお♡）

「んっ♡はあ……♡あっ♡ああ♡」

「くう……！　まだ止まらないっ……！」

びゅる♡びゅくくう♡

残滓がぶびゅっ♡と飛び散り、白濁まみれのお尻へ更に上塗りされる。

「う……あ……♡はあ……あ……♡」

ぬりゅう……♡

ぴったりとおまんこにくっついていたおちんぽが、ゆつくりと引き抜かれる。

支えを失った身体が、バランスを崩してがくんと崩れ落ちた。

「……っ！」

ルシウス様がはつと我に返り、息を吞んで青ざめる。

「お、俺は……なんてことを……すまない、大丈夫か……？」

「はい……大丈夫、です……。ルシウス様の解毒が出来て、良かった……」

「……少し、休んだ方が良く。ベッドまで運ぼう。寝室はどこに？」
「二階の、階段を上がってすぐの部屋です……きゃっ！」

ルシウス様が私を抱き上げ、無言で階段を上り部屋まで運んでくれる。

そして私の身体を拭き清め、ベッドへ寝かせてくれた。

「本当に……申し訳なかった。弁解の余地もない」

「謝らないでください。もとはと言えば、私が薬を取り違えてしまったせいなので。治療と思って……忘れてください」

「……………」

そう言うと、ルシウス様は何故か苦しそうに顔を歪めた。

「……分かった。では、これで失礼する」

彼はすつと立ち上がり、部屋を出て行った。

——そしてその日からルシウス様は、ぱたりと顔を見せなくなつた。